こもれび

正月飾り

森　謙二

昭和三十年代前半の頃である。暮れになると、祖父が縁側の日溜りに座り、正月飾り作りに勤しむ姿を思ひ出す。正月飾りとは、注連飾りと正月棚のことである。

◇　◇

注連飾りは手作りで、藁を編み注連縄にし、それに幣束をつけて橙・干し柿・目刺し（鰯）等を飾りつけたものから、裏白だけを結びつけた簡単なものまで、何種類か作った。大きな注連飾りは玄関の入り口に飾ったが、小さな注連飾り（後に輪宝飾り・輪〆と呼ぶことを知った）は表門・勝手口・井戸・納屋・厠・自転車等至る所に飾り、わが家の屋敷内に祀られてゐた鎮守様と呼ばれる屋敷神と、先祖伝来の田圃に祀られてゐた地主様にも飾った。注連飾りを飾るのは、孫たちの仕事である。家のあちこちに飾るべき場所があり、それに地主様は家から自転車で出かけなければならず、子供にはやっかいな仕事であった。

正月棚は木製の組立式で、四方を木で囲み、前面をその年の恵方に向け、後面の簾には歳神様のお札と幣束が掛けられてをり、この棚には常緑の松が飾られた。大晦日から、家の神棚と一緒に、正月棚や注連飾りの場所へ、餅と里芋、大根と人参のナマス、そして御神酒が供物として捧げられてゐた。

私たちは、お正月になると必ず下着も上着も新調されて、新たな気持ちになった。お雑煮は祖父が井戸から汲んだ水をつかひ、仏壇と神様へのお供へが終はるまでは、箸を持つことさへできない特別な日であった。

◇　◇

この時からすでに半世紀以上が過ぎてゐる。もう手作りの正月飾りを作る家はほとんどないだらう。民俗学では、正月行事は歳神様を迎へ、豊穣を祈る儀礼であり、日本の典型的なハレの行事（儀礼）と教へてゐる。ケ（＝日常）がハレ（＝非日常）に転換をしていくためには大きなエネルギーを必要とする。そのエネルギーを生み出すものが「慎み」であり、正月の準備もその一つであらう。そして、エネルギーが蓄へられることによりハレの日の行事（儀礼）が生まれる。

しかし、今日ではハレとケは循環しなくなり、区別がなくなってゐる。日常の中にハレが吸収され、儀礼は衰頽していくやうになった。正月になっても、日常と同じやうにデパートやコンビニは開いてゐるし、正月になっても、真新しい洋服に身を包むこともしない。正月飾りをコンビニやスーパーで気軽に買ひ求め、消えていくのも、その一つの表現である。

◇　◇

最近国会で「働き方改革」についての議論があり、その一貫として、お正月にはデパートもコンビニも休みにしようといふ意見がある。私はこの意見に賛成である。社会の中に日常とは異なった空間を作り出すことによってこそ、「慎み」を学び、新しい発想やエネルギーを作り出すことができるからである。

もり・けんじ＝茨城キリスト教大学名誉教授